

サッカーにおける育成システムの国際的比較

ーその恩恵と弊害ー

氏名 会田 琢磨

要旨本文

本研究では、著者が8年間続けたサッカーは改めてどのような起源から始まり、世界へ伝播したのか、ヨーロッパや南米の国はどうしてサッカーが強いのかという興味から、本研究に至った。その中で、育成システムに焦点を当てて、日本の育成システムとサッカー強豪国であるスペインやイングランドの育成システムに着目して、国際的な比較を分析した。それぞれの育成システムのメリット、デメリットを明らかにすることで今後の日本サッカーの発展に向けた著者の主張を示すことを目的とする。方法として、日本とスペインの育成方法や考え方などの違いを発見することで今後の日本サッカーの取り組むべき課題を見出す。結果として、育成年代において日本はスペインと比べて部活動の有無、試合形式、カテゴリーを越えた飛び級の可否、指導方針がスペインと比べて大きな違いが見られた。日本の育成システムの恩恵として、部活動やクラブチームなどの幅広い育成基盤があり、教育との両立ができるところが恩恵として挙げられた。一方、弊害としては、トーナメント方式とリーグ戦の乱立による成長の阻害、高校サッカーとJリーグアカデミーの分断、小学校年代の指導者の質が低いことが挙げられた。スペインの育成システムの恩恵として、明確な育成哲学や年間を通したリーグ戦によるプロと同様の生活環境などが挙げられた。弊害として、トップクラブのアカデミーに才能が集中することによる育成環境の地域格差が挙げられた。考察として、日本の育成システムはトーナメント方式とリーグ戦が乱立していることによって選手1人1人の出場機会に差が生まれ、個人の成長よりチームの勝利を重要視した指導になっていると考えられる。部活動の指導においては、担当の顧問が未経験者である学校も多いため、日本サッカー全体の底上げが上手くできていない。さらに、カテゴリーを越えた飛び級ができないことによる成長の制限も課題として考えられる。今後の日本サッカーのさらなる発展のために、育成システムを見直すべきである。